ありふれてないミュータントは世界最強

アメコミ限界オタク

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

最強のミュータントを作り、兵器利用するウエポンオメガ計画。

その最高傑作の超人兵器として誕生した主人公がトータスを面白おかしく楽しみながら、そのチートレベルのミュータントパワーで無双するだけの物語。

ぶっちゃけＸメンが大好きでミュータント設定にロマンを感じてる作者がありふれ×アメコミで二次創作やりたかっただけ。

主人公が苦戦するシーンすら無い予定なのでそういうのが嫌いな人はブラウザバック推奨。

目次

第一話 …… 1
第二話 …… 10
第三話 …… 17
第四話 …… 25
第五話 …… 31
第六話 …… 38
第七話 …… 50
第八話 …… 61
第九話 …… 76
第十話 …… 85

第一話

物心が芽生える、というのはこういう感覚なんだろう。

俺はたった今、確立されたばかりのはっきりとした自我に戸惑いを覚えつつも、心は解放感と興奮に満たされていた。

戦闘実験の最中に、センチネルが俺の首輪を破壊したことにより、俺の脳に働きかけて人格を封じる機能が破壊されたようだ。

「８９号が制御できません!!　デリートプログラムを実行しますか!?」

「ふざけるな!　ようやくここまで育てた1体しかない成功例だぞ!!ここで破棄したら我々が消される!」

ガラスの向こうでは俺に指示を出していた研究者たちが大パニックになってる。もし俺が逃げたら心臓と脳の中に仕込んである小型核爆弾で爆発させる手筈になっているようだ。

テレパシーで心読んだから間違いない。

取り敢えず相方の制止を振り切って爆破ボタンを押そうとしてるやつの手を止める。

『止まれ』

そう念じると、ピタッと石のように動きが固まる。

テレパス能力は高レベルになると人間の行動を物理的に操れる。学習装置で刷り込まれた知識通りだ。

「ぶっ壊してやる」

勝利を確信したようにガッツポーズで拳を握る。

するとテレキネシスで爆破装置を握り潰したように破壊できた。

砲弾を防げる特殊アクリル板越しだろうとお構いなしだ。

その様子を見てもうひとりの研究者が狂ったように冷や汗を流しているのが見えた。

「センチネル全機出撃しろぉぉぉぉ!!　８９号をここから出すなぁぁぁ〜〜!!」

スピーカーから響くヒステリックな悲鳴にも近い絶叫をＢＧＭに、戦闘実験室の全シャッターが開く。

より実戦に近いデータを録るため、という理由で大都会を丸ごと再現した実験室は部屋と呼ぶにはとてつもなく広い。

センチネル……俺のようなミュータント？と呼ばれる能力者と戦うために造られたキラーロボットが都市の人口に匹敵する数で押し寄せてくる。形も丁度人型で大きさ的にも俺と替わらない個体が大半を占めていて非常に町の住人っぽさが出ている。

そして追従するのは戦車や戦闘機の形をした特化型センチネル。
兵器保管庫の兵器を総動員してでも俺を捕まえようとしているみたいだ。
この兵器を山をスクラップの山にするのはいいが、その前にやることがある。
「まずこれを取り出さないとな」
頭と心臓にある爆弾をテレキネシスで取り除いた。
この作業で『痛い』という感覚を始めて味わって新鮮な気分だったが、それはそれとして、これがなかなか不快で二度と味わいたくない感覚だった。
手に持った不快な爆弾はそのまま握り潰す。
ボンッ！と手の中で爆発した感触はあったが、それだけだ。
痛いとか熱いとかの感触は一切無く、怪我も特にしてない。
この分なら体の中で爆発させても大丈夫そうだった。
無駄に痛い思いしただけじゃないか。
なんだろう、無性に堪えがたいマグマのような、炎のような感情がジワジワとこみ上げてきた。
俺の胸を満たすこの不快な激情はなんだ？
なんという感情だ？
あぁなるほど……これが『怒る』ってことなのか。

首輪が壊れてからまだ数分しか経ってないのに、産まれて始めての経験ばかりだな。

拳を握り、腕に力を籠めると体内で発電した電力を集中させる。すると腕が青く発光し、抑えきれない電力が小さな雷となってスパークする。エネルギーが充填された証拠だ。

センチネルの大軍に向かって横凪ぎに手刀を振る。

たったそれだけ。

たったそれだけで空間が歪むほどの大電力を孕んで振るわれた手刀が、荷電粒子を帯びた指向性のある衝撃の刃と化した。

稲妻と衝撃の刃は進路上の建物と道路を爆発と斬撃を持って廃墟にし、進路上のセンチネル全てを真っ二つに切り裂いた。

「まだまだ行くぜぇ!!!」

また腕に電力を蓄え、今回は追加で異次元の赤いエネルギーが収束される。

オプティックエネルギーと呼ばれるそれは、青い電力と交わり紫色の光を放つ美しい

光線となって解放された。

ドドドドドドドドドドドドドド!!!!!!!!

そんなド派手な爆発音と伴い、俺はレプリカの都市を焼き払う。

地下に造られた研究所は乱射される破壊光線の威力に耐えられずに悲鳴を上げる。

「ひいいいいいい～～!!止まれ!止まるんだ８９号!!これは命令だぞ～～!!」

小太りの研究者が叫ぶ命令ももはや俺の鼓膜には届いても、首輪を外された俺の脳にはなんの影響も与えない。

「うるさい!」

ジュッ。

逆に俺の放つ光線によって一瞬にしてその醜く太った体は原子の欠片も残さずに消滅する。

そして破壊の限りを尽くした８９号こと、俺がテレポートによって姿を消すと同時に、崩落が始まり、全ては地下１０００ｍに埋もれて消えた。

かくして俺は真の自由を手に入れて産まれて始めて外の世界に出た。

地下に造られた仮初めの世界ではなく、本物の地上世界だ。
地下に監禁されていたのも、太陽の光が俺に無限に等しいパワーを与えるためだと言われていたが、まさにそうだったんだろう。
始めて見る太陽は、その光を浴びるだけで体の底から力が沸き上がってくるのだから。
まあそんなことよりも状況の把握が先だ。
まず、ここは公園という遊び場だ。
太陽が真上にある時間帯なので遊んでいる子どもたちも大勢いる。その子たちは遊びに夢中であり、付き添いの大人も子どもを見守るのに忙しいため、幸運なことに突然テレポートしてきた俺のことには誰も気付いていないようだった。
俺自身もその子達と同じくらいの年齢のため、子どもの群れに上手く溶け込めている。
その子どものひとりが俺に近付いて話しかけてきた。
「ねえ、君も一緒に遊ばない！」
産まれて始めて遊びに誘われた、俺感動。
「いいよ、なにして遊ぶ？」
「おままごと！」

女の子はそう言うと、俺になにかの配役を振って演技を始めた。どうやら役に従った演技をする遊びらしい。

俺も違和感の出ないようにその場の空気に合わせておままごとを演じていると、太陽が沈む時間帯となっていた。

その女の子も迎えの父親らしき男が来たので別れることになった。

「それじゃまた遊ぼうね！バイバ～イ！」

「またな。　ところでお前、名前なんて言うの？」

「私は中村恵里だよ、バイバイ！」

そう言うと、その女の子……じゃなかった、恵里は赤信号に気付かずに道路を渡った。

あ、これなんか不味い気がする。

道路の向こうでは父親が鬼気迫る顔でこちらに走ってくる。当たり前だ、トラックがすぐそこまで迫ってるのだから。

……。しょうがない。外の世界では目立つことはしたくないけど、産まれて始めての友達だ。記念に助けてあげよう。

「テレキネシス」

俺がトラックに手を翳すと、俺の手から伸びる青白いエネルギーが恵里とその父親の周囲にバリアを展開、轢かれる寸前にトラックはバリアに激突することで強制的に停止

する。
車は大破したが運転手はエアバッグが正常に作動したので無傷だ。
そして、轢かれる寸前だった恵里とその父親もバリアによって無傷だ。
そして事故を聞きつけて集まるギャラリーが奇跡のような生還撃を目撃して信じられないように目を丸くする。
そして集まるその奇跡を起こした俺への注目。
尊敬するような憧れるような、そんな子どもたちの無垢な目と、それとは真逆の大人たちの恐ろしい怪物を見るような目。
ふたつの相反する感情が俺にぶつけられているのをテレパスを使わなくても分かるほど分かる。
「じゃ俺も帰るので」
帰るとこないけど、その辺で休めば良いや。
そそくさと逃げようとする俺の手を恵里が掴んで止める。
「なにか？」
「あなた名前は？また会えるよね!?」
キラキラキラキラ。
そんな目で俺を見つめながら言う恵里。

名前……。

我輩は８９号である、名前はまだ無い。

どう答えればいい？

「悪いけど俺はもう帰らないと。さよなら」

俺はそう言って手を振り払うと、今度こそ本当に逃げるようにテレポートした。

第二話

地上世界に来てから数ヶ月。

今では廃棄された工場での生活や、隅っこ暮らしならぬ路地裏暮らしもまた、板について来た。ホームレスの先輩方ありがとう。

おかげで俺は元気です。

そして今していることは、それは……。

カタカタカタカタ。

パソコンのキーボードを叩く音が仮拠点のひとつである段ボールハウスのＢＧＭになっている。

あの日の後、俺を作った研究所の残骸を調べていたら奇跡的に無事だったサーバーから俺に関するデータや計画について調べてみた。

端末やキーボードが無かったのでアクセスには電子機器をハッキングする能力を使った。

そこに保管されていたデータによると計画の名前は『ウエポンオメガ』と言うこと。

そしてオメガ計画の目的はより強く、より素早く、より優秀で、より大規模で、より高い能力を持つミュータントの遺伝子を集めてひとつに纏める。
そうすることでオリジナルより強力な力で多才なパワーを誇る最強の人造ミュータントである『ウエポンオメガ』を造り出し、そのミュータントから自由意思を奪い、超人兵器として利用することにある。
なるほど。
俺は兵士ですらない、兵器扱いだったのだ。
オメガ計画は元々は普通の人間を強化人間である超人兵士に変えるためのウエポンX計画と同一企画だったそうだが、最低限人道には配慮していたX計画と違い、オメガ計画はその最低限の配慮すらない。
計画がどこかでより効率と利益を求めた悪意のある誰かの手に渡り、歪められたようだ。
或いは、オメガ計画は最初から悪意しか無かったのかも知れない。
どちらにせよ俺にとって重要なことは、計画がまだ続いていること。
そして俺と同じようなウエポンオメガがまだ造られていることもな。
当面の俺の目標は、俺の弟や妹にあたるオメガたちを解放すること、オメガ計画を潰すことのふたつだ。

ちょうど盗んできたログには、他の研究所にデータを送信した履歴が残っていた。
ちゃんと履歴消しときなよ、と思って送信日時を見たら俺が暴れる直前の時間だった。
……消す余裕が無かったようだ。
まあ消されたところで、飛躍的に能力が成長した今の俺なら現実改変や時間の巻き戻しもできるから、履歴の復旧も楽勝だろうから意味はないか。
その送信履歴を電波探知で辿って行くと、この付近のオフィス街に一般企業に紛れた研究所があると判明した。
立地的に人体実験などはしていないようだが、そういう実験を行っている各研究所の研究データが必ずここに送信され、整理保管されている重要拠点だ。
ここのデータを盗めば必ず俺の欲しい情報が手に入るはず。

俺はテレポートでビル内に侵入する。突入先はビルのサーバー室。
俺が侵入した瞬間、警報が鳴り響いてサーバー室に侵入者がいると知らせる。
これも想定内のことなので慌てず騒がず、サーバーのひとつに手をかざして能力を使う。
すると電波や電気信号を通して俺の脳内にサーバー内の情報が直接インプットされ

ていく。
俺の侵入にはもう気付かれているはずだが、武装した警備員が突入してくるまでに７０秒はかかる。
そして俺が全ての情報を盗むまでに１分もかからなかった。
監視カメラに向かって中指を立てて舌を出して挑発してから即テレポートで逃げる。
その１０秒後、アサルトライフルを構えた警備員が突入する頃にはサーバー室はもぬけの空だった。

「いや～、ここまで上手く行くとはね～」
拠点の廃工場でひとりで祝杯をあげている俺、オメガ８９。
飲んでるコーラはその辺のコンビニで買ってきたもの。お金は偽造したキャッシュカードで払った。カードはニセモノでも電子マネーはハッキングで作った本物だからバレることはない。
情報を整理するためにノートに書き出す。
まず、オメガ計画は８９号（俺）が誕生するまでに俺と同じ遺伝子を持つ８８人が造られたが、いずれも人の形を保てない異形や生存能力に欠けた個体（産まれてすぐに死

んじゃった個体）を含めて失敗作の山が重なっていた。
それは大量のＸ遺伝子を無差別にかき混ぜたせいで起こる互いの遺伝子への拒絶反応であり、遺伝子レベルの喰い合いが働いた結果起きる遺伝子異常だと。
８９番目に産まれた俺はそういった遺伝子異常を克服。そして全てのＸ遺伝子に眠る力を完璧に引き出すことでオリジナルになったミュータントすら超える力を発揮し、俺だけの固有能力の発現にすら至った唯一無二の成功例にして現時点での最高傑作であること。
そして俺の成功例を元に、次々と〝妹たち〟が造られていること。
以上が今回判明したオメガ計画の大まかな流れだ。
そして妹たちについてだが、女にしたのはキチンとした理由があるようだ。
ミュータント能力の起源となるＸ遺伝子。
そのＸ遺伝子は父親側からの遺伝でのみ、親から子どもへと継承されていく。
完全な父性遺伝だ。
万が一制御下を離れて暴走し、自分たちの知らぬところでＸ遺伝子を蒔いたりするケースを想定すると子どもに遺伝せず、〝そういうこと〟をしたらすぐに分かる女の方が管理しやすい、という理由から意図的に女の子のオメガを作ることに腐心しているようだ。

ここからいちばん近い研究所だと〇〇キロ離れているが、テレポートが使える俺なら関係ない。

先ほどのデータ保管施設のデータ泥棒も直ぐに俺の仕業だと発覚する。

やつらにとっても貴重な財産である『妹たち』が〝廃棄処分〟されるようなことは無いだろうが、俺が気になっていた自我を奪う例の首輪に関する情報が無いことも気がかりだった。

あれもオメガ計画の産物なのか、計画とは関係無いのか。それすら分かってない状況だからな。

もし首輪がウエポンオメガ専用の物でないなら他のミュータントや人類に使い、奴隷兵士をいくらでも量産可能ということだ。

そうでなくてもセンチネルや戦闘ロボットの軍隊が待ち構えていることは考えてる。現に俺のいた研究所では軍隊顔負けの規模の大戦力だったからな。

俺の能力を知っているやつらが、防衛対策に手を抜くとも思えない。

よって、ここからはスピード勝負になる。

やつらが俺を倒せる戦力を整えるか、俺がそれより先に妹たちを救出するかの勝負だ。

俺は祝杯をそこそこに切り上げて、テレポートで次の襲撃に移る。
待ってろまだ会ったことのない妹たちよ。いま助けに行くからな。

第三話

核シェルターを転用して造られた巨大施設内では、怒号と銃声が絶えず響く地獄になっていた。

「８９号だ！オメガ８９が攻めてきたぞ!!」

「例の逃げ出した兵器だ！捕まえても殺してもいい!!賞与がたっぷり出るぞ！殺せ!!」

バイク乗りの日本ヒーローを模したパワードスーツ型センチネル・アイアンライダーを装着した軍隊上がりの傭兵たちが侵入者……つまり俺を攻撃する。

アイアンマンのリパルサー技術を盗んで造られたリパルサーレイが嵐のように殺到するが……。

「効かん」

それに対して水を切るように、手を振り払う動作をする。

たったそれだけでリパルサーレイの弾道は曲げられ、俺を避けるために曲線を描く。

それは超強力な電磁場によるエネルギーの波長制御。リパルサーやブラスターによ

る攻撃は完全に無力化できるバリアだ。
その動きは、まるでビームが自分の意思で俺を避けたように錯覚するほどごく自然な軌道だった。
『撃て!!撃ち続けろ!!やつを９０号の元に行かせるな!!!』
続けざまに対人用小型ミサイルが一斉射されるが俺はテレキネシスでミサイルを止め、ハッキングでミサイルの爆破を防ぐ。
ダメージはゼロ。
警備チームは逆にテレキネシスでスーツの内部構造を破壊されて無力感されるか、ハッキングされて仲間を攻撃させられるかの二択となっていた。
全体放送で武装職員に命ずる所長はこの状況を把握していないのか、こう続ける。
『やつを殺した者には５００万ドルの賞与もくれてやる!!!　なにがなんでもやつを通すな!!』
「命あっての物種だ!」
「カネよりも命の方が大事だ!」
まだ無事な警備兵の行動も、職務放棄して逃げ出すか、武器を捨ててホールドアップするかの二択だった。

降伏した敵のひとりにオプティックブラストの光弾を構えて脅す。
「９０号だ、ここにいるだろ？　９０号はどこだ!?　言え!!」
口止めされている警備兵は中々口を割ろうとしない。喋った場合の罰則が恐ろしいようだ。
「ならこうしてやる」
俺はそいつの頭を掴むと、テレパスでそいつの心に侵入する。
その男の記憶の中にある９０号に関する記憶と情報を奪うと意識を奪ってから解放してやる。
ついでにここで働いてる間の事を全て忘れて貰った。
「ここか……」
大勢の警備兵を薙ぎ倒してようやく９０号の隔離部屋に到着した。
扉を壊して突入すると、金属製の首輪を付けられた女の子が虚ろな目で待ち構えていた。
やはり自我を奪われているようだ。
『９０号、目の前の少年を殺せ』
赤い髪をたなびかせ、９０号は全身に鎧のように炎を纏って突撃してくる。
背中から翼のように2対の炎を生やして推進力にすることで初速の時点で音速を超

える速さを実現してるようだ。
そのタックルを避けてカウンターで首輪を壊そうとするが、硬くて壊せなかった。
計測上、緑の巨人や雷神や黙示録の魔人以上のパワーを誇る俺が壊せないほどの強度。
相当頑丈な物質で出来ているな。
熱を吸収できて頑丈な金属といえば……。
「ヴィブラニウムか」
『ご名答、流石はお高い学習装置を使っていただけの事はあるな』
所長も余裕を取り戻したようだ。小馬鹿にしながらも俺の推測に拍手する。
９０号を中心に放熱が起きてるせいで、空気が焼けるように熱い。というか、コンクリートで出来ているシェルターが放射熱で溶けてるほどだ。
この体には溶鉱炉の中を裸で泳げるレベルの超高熱耐性があるから平気だが、それが無ければこの場にいるだけで即死だ。
「落ち着け妹、お兄ちゃんが何とかしてやるからな、少しだけ我慢してくれ」
なんとか宥めようとするが、妹はそれを聞かずに再びタックル。
今度は避けずに正面からバリアで受け止める。
バリアに激突して弾かれる妹を即座にテレキネシスで捕獲し、ベアーハグで捕まえ

る。
火力を上げてなおも暴れる妹に対し、テレパスで強制的に能力と意識をシャットダウンさせる。
ヴィブラニウムの分子構造を解析すると、分子結合の信じられないほどの硬さと柔らかさのバランスにびっくりした。
硬さと柔らかさのバランスが金属としてこれ以上ないほど理想的だ。
力で壊すことに拘ると苦労しそうだ。
なら腕力以外の方法を使うか。
分子操作能力でヴィブラニウムの分子結合を引き剥がし、首輪を解錠する。
『!?!?　バカな！　そんなバカな!!』
所長もこれには予想外だったようで、俺の能力に驚愕する。送信されたデータには無かった能力だもんね。
ふははは！どういう理屈かは知らんが！自我を得てから超能力が大幅に強化されて止まるところを知らんのだよ!!
「これでよし、もう大丈夫だぞ妹よ」
テンション爆上がりで調子に乗りまくる。
「え、あ……う……」

若干引いてる妹こと名前はまだない９０号。
どうやらこの子も自我を得たばかりで動揺してるようだ。
安心させるために頭を撫でてやると落ち着きを取り戻す。髪の毛さらさらで猫耳も生えてるじゃん。ちなみに人間の耳もちゃんとついてる。
すげえ。なんかよくわからんがすげえ。
「そんじゃ、兄ちゃんはまだ仕事が残ってるからちょっと待っててくれ」
妹を残して主任の元へテレポート。
「ひっ、やめ……」
「死ね」
命乞いしようとする主任の首を掴んで電撃を流す。
電気椅子の数百倍の電流と電圧で瞬く間に燃えカスとなった主任の肉体は灰となり、ポロポロと崩れ落ちる。
「じゃ、帰るか」
またテレポートで妹の元に戻ると、俺はあっけらかんと言い放つ。
「……ど、ど、こに、か…かえるの？」
たどたどしい言葉ではあるが、妹はきちんと質問してくる。良い子だ。
「俺たちの家だ」

家族が増えるよ！　やったね俺！
新しい兄妹になった９０号を連れて工場に戻ると、能力で作って設置してた風呂で身体を洗ってやる。
「ほら、ちゃんと頭と身体洗うぞ！暴れるな！」
「う～、いや！　や～！」
子どもかッッッ!!
イヤイヤ期のように、あるいは猫のように風呂を嫌がる妹を強引に風呂に入れる。
だってこの子、風呂入ってない猫みたいな匂いしてて結構匂うからな。
流石に女の子が不潔で臭うのは不味いだろ。
妹の世話をするのも兄の仕事ということで体と頭を洗ってやる。
「明日は別の研究所襲ってくるからな～」
そんな形で今日から俺たちの兄妹を救う日々が始まったのだった。
「あ、そうだ、俺たちの名前も考えないとだな～」
「？」
小首を傾げる妹の頭を撫でてやると喉を鳴らして心地良さそうに目を細める。
そのまま顎の下も撫でると、そのまま寝落ちする。
「おやすみ、焔」

「ほむら……？あたしのなまえ？」
「そう、焔。炎の能力者だから焔だ！」
頭を撫でながら「焔」と名前を聞かせると、焔はえへへ、と笑いながら眠りについた。
ふはははは、ぐっすり眠るといい。
俺も明日に備えて眠りにつく。
明日からは戦争の日々が待っているのだから。

第四話

耳を塞ぎたくなるようなやかましい警報と、目がチカチカする赤いランプの光が大して広くもない通路を反響する。

こちとら感覚が鋭いだけあって、マジで目と耳が潰れそうになるほど不快だ。

ダダダダダダダダダダダ!!!!!

ビイーーーーーーー!!!!

少なくともランプの不快な光に比べれば、この機銃掃射もセンチネルのビームも、どちらも大したこと脅威にはならない。

体を金属に変化させ、体表に電磁バリアとオプティックバリアの三重防御で防ぐ。

「アダマンチウム製の銃弾だぞ!?　ハルク対策の特別製だってのになんで平気なんだ!?　ロシアミュータントの紛い物野郎なんて一発で殺せるってのによぉ！」

「やつは金属の体になれるだけじゃない！体表に薄いシールドを張ってるんだ!!　くそがっっ！　物理攻撃は効果が無いって噂は本当だったのかよ!!」

「ならどうすれば倒せる！」

「知るか！とにかく撃ち続けろ！」
雇われ傭兵部隊が必死にライフルを乱射してくるのを無視して、センチネルを破壊する。
センチネルの顔面から両手を差し込み、そのまま裂けるチーズのように縦に真っ二つにする。
そしてセンチネルの残骸を哀れな傭兵部隊に投げつけてぺちゃんこにすることで殲滅完了。
何人かは生きてるがもう戦える状態じゃないので見逃す。俺だって動けない相手に止めを刺して回るほど鬼でもないし、暇じゃない。
……尋問はするけど。
傭兵の首を掴んでなるべく容赦なく言葉を浴びせる。
「おい、この研究所にいる91号はどこだ？　答えろッッッ!!俺の妹はどこだ!!」
「む、向こうの部屋だ……。　あの地下の部屋にいる、こ、殺さないでくれぇ……」
その傭兵を思いっきりぶん殴って苦痛から解放してやると、指を指した方に進む。
大型金庫やシェルターに使われる鋼鉄製の分厚い扉に突き当たった。
「ここが出入口か」
扉に手を当て、中の空間を把握する。

地下に何百メートルも続く長いエレベーターと、その先にはキロ単位で広い空間がある。
確か盗んだデータだと、ハイブと呼ばれている施設だ。
そこに設置されたシェルター内に９１号が監禁されてるはずだ。
エレベーターの正面にはセンチネルと傭兵部隊がフル装備で待ち構えているので、バカ正直にエレベーターで乗り込むような真似はしない。
建物全体の構造はもう把握できた。
テレポートを駆使してハイブ内に侵入、そして構造上の弱点となる支柱や壁を壊して回る。
相手も俺の侵入に直ぐ察知し、その行動の狙いに気づいている。
慌てて部隊を差し向けるが時は既に遅い。
「じゃあな、生き埋めにでもなってろ」
最後の柱を破壊すると、ハイブ全体が悲鳴を挙げて崩落を始める。
９１号のいるエリア……アダマンチウム合金で作られたその部屋は絶対に外からも中からも壊せない、最も頑丈で、最も安全な場所。
そこ以外は全て土と瓦礫に埋もれる。
独断で首輪の自爆ボタンを押した判断の速い研究者もいたが、首輪爆弾は不発。

俺が体からＥＭＰを出してジャミングしていたからだ。
……念のためジャミングしてて良かった。
してなきゃ詰んでた。
そして今、俺はシェルター内で９１号と向き合っている。
水色の髪をした彼女は、能力がまだ制御できてないのか、自分の腕や足を水に変化させては生身に戻して、という感じで能力を小刻みに使い続けてる。
ずっと虚ろな目でそれを繰り返してるのは、正直なところ、兄ちゃんでも怖いぞ。
「よし、もう大丈夫だぞ～。　兄ちゃんが助けてやるからな～」
抱き寄せて頭を撫でながら首輪を外してやる。
今回のもやっぱりヴィブラニウム製だった。
そして外した首輪は回収しておく。
そのうち溶かして道具を作れば、きっと役に立つようになる。
「えっ、あれ？　え？　ここ、どこ？」
自我が芽生えたういういしい反応もこれで三回目だ。一回目は俺、二回目は９０号。
「安心して、俺はお前の兄ちゃんで、味方だ。　これから行くところにもお前の姉ちゃんも待ってる。安心して着いてこい」
「……」

警戒するように、怯えるように俺を見上げる９１号。名前が必要だな。
「そうだな、体が水になる能力だし……アクア。
『アクア・ザ・サブマリナー』ってのはどうだ？」
「あ、く……あ？　な、まえ？」
「そうだ。お前の名前は今この瞬間から！アクアだ！」
俯いてあくあ、あくあ、と名前を呟くアクア。
そして俺の手を握る。
「あくあ、つ、つれてって、にーに」
たどたどしい言葉だが、はっきり伝わってくる。
そして焔の時にも感じた、この胸の暖かみのような、じんわり広がるこの満足感と幸福感は。
この感情はなんだ？
この感情の名前をなんと呼ぶのか知りたい。
……話が逸れた。
とにかくアクアを連れ帰るのが優先だ。
テレポートでアクアを拠点へ連れ帰ると、焔が出迎えてくれる。
「にいに～、お帰り～」

「ただいま、焔。ほら新しい妹を連れて来たぞ」
「あくあ……です、よ、よよしく、おねがいします」
アクアは少しどたどしいが、ちゃんと挨拶できて偉いので褒めてやる。偉いぞ～、と頭を撫でる。
「アクアよ、今日からこの焔がお姉ちゃんになるのだ～。　良い妹とは姉に尽くすモノじゃ……精進せい」
「少し黙ろうな」
ポカ！
早速妹をこき使おうと画策する焔にげんこつを入れて置く。いてぇ～！にゃ～！と騒ぐ焔を無視して、疲れているだろうからアクアをベッドで休ませる。
その間に俺は晩飯の準備をする。
ふたりとの出会いを祝して盛大にご馳走を用意してやらないとな。
その日の豪華な食事を見た焔は、次の日も贅沢な飯をねだるようになるのは別の話。

第五話

「ハクにい起きろー、腹減ったー」

ぺしぺし、ぺしぺし。

寝ている俺を軽く小突いて「飯寄越せー」と催促する焔。始めの子猫のような甘えん坊で可愛いやつはどこへ消えたのか、今では飯をねだり、日がな一日食っちゃ寝する生物と化している。　猫じゃん。

「起きろー！飯作れー！」

ぺしぺしぺしぺしぺし！

加減が無くなってきたのでお布団ガードで身を守る。ふははは！お布団要塞には入ってこれまい！

「焔お姉ちゃん、ハク兄には疲れてるんだよ。ご飯なら私が作るから寝かせてあげて」

俺を気遣う出来た妹はアクア。最近はメイド服とお菓子作りと料理にハマってるらしい。

店で売れそうな代物を作っては俺や姉妹に食わせてくれる。アクアの飯は今日も美

味い。
俺が褒めてやると嬉しそうに顔を綻ばせる。
「えへへ～。それほどでもないかな～？」
とか言いつつも撫でろ、と言わんばかりに頭を差し出してくるので撫でてやる。可愛い。
「おっしゃー!!今日も修行だぁぁぁ!!」
朝５時からずっと元気に騒いで筋トレしてるのは９２号こと、ヒョウカ。
ご近所さんに迷惑だからやめなさい。
能力は氷と凍結のクールで冷たいものなのに、性格は兄妹１の熱血だ。ちなみに食べ物は熱い物と辛い物が大の苦手で冷たい物と甘い物が大好きだ。
格闘技大好きでトレーニングを修行と呼び、能力的にアクアと組んだら無敵だからという理由からよくアクアを修行に誘っている。
だいたい断られてる。
たてがみのような髪をたなびかせて腕立て伏せしながら叫ぶその姿、まさにライオンが如く。
名前はヒョウなのにね。
「ごはんできたよ～」

アクアが朝食に呼ぶと、音を置き去りにする速さで庭からリビングに上がる。
「朝飯だぁぁぁぁぁ!!!」
誰よりも早く飯にがっつくその姿は末っ子ぽさ全開だ。本当に元気ね。

これが俺たちの日常風景になってから早数年。
……そう、ウエポンΩ計画打倒を掲げてから早いことに、もう数年が経っている。
え？時間飛び過ぎだって？知らんな。
あれから俺は焔とアクアとヒョウカに能力の訓練をさせ、体も鍛えさせていた。
筋トレに関しては、元々が兵器として作られた俺たちは身体能力も兵器レベルだったのであまり鍛える意味は無かったのだが、身体能力の高さや限界を知る上では十分に価値があった。
三人で「おりゃー」とか言いながら１００トンもある貯水タンクでキャッチボールを始めた時は流石に度肝を抜かれた。
人前ではみんなびっくりするからやっちゃ駄目だと教えたので、多分もうやらないと思う。
ヒョウカ以外は。
その時の訓練で焔のパイロキネシスとアクアのアクアキネシス、ヒョウカのフローズ

キネシスについて細かく知ることが出来た。
まず、焔の炎は最大１億度まで上昇する。
そして熱伝播と熱放射（空気や物を媒介にして熱が伝わる現象）も完全に制御できている。
最大出力の火でも近づくだけなら熱くないし、火傷もしない。
そして焔はその炎を全身に纏うことでバリアにし、ジェット機のように飛ぶことだって出来る。しかも速度はマッハ５０で小回りまで効く超ハイスピードだ。
空気をプラズマ化させるため、衝撃波や空気抵抗も起こらない反則っぷりだ。
火炎放射と体当たりで大体倒せる、というのが本人談。
次にアクア。
アクアの能力は身体を水に変える能力。
周囲の水分を分子レベルで無制限に操れる能力。
それに加えて、液体であればなんでも分子レベルで操れるという驚異的なスペックだった。
アクアは人体の水分を直接操り、溶岩や溶けた金属だって操れる。
対人戦に置いてここまで優れた能力はそうそうない。
それに海が近くにあれば大津波だって自由に操れる人型災害にだってなれる。

本人は兄妹1温厚で優しい性格だから凶悪な使い方はやらないだろうが、対人殺傷力は兄妹1だ。

戦闘スタイルは技巧派で、他の兄妹のサポートに特化してる。

そして最後にヒョウカ。

氷、冷気、凍結を操れる能力。

能力の細かい制御は苦手だが、能力の規模は半端なく大きく、本気を出せば星をひとつ丸ごと永久凍土にできるパワーが売りの末っ子。

身体能力も兄妹では俺の次に高く、妹たちの中でいちばん恵まれた体格をしてる。

見た目だけならヒョウカが一番お姉ちゃんっぽく見えるくらいだ。

本人の豪快で大雑把な性格と姉妹1の身体能力と相まってヘビー級パワーファイターとして俺と同じ前衛役だ。

そんな3姉妹と共にウエポンオメガ計画をぶっ潰し、俺たちは平和で静かなを日々を手にいれたのだった。

……なぜ、俺たちウエポンオメガが平和に暮らせているのかについては、そうだなー。どこから話そうか。

俺は世界中を飛び、オメガ計画関連の施設やデータを潰して回った。
その努力が報われて、俺が暴れていた影響で９２号……ヒョウカが開発されたのを最後に計画は予算不足やら被害拡大やらで頓挫。
それ以降どれだけ調べてもオメガ計画に関する情報は見つからなくなった。
始めのうちはやり口が巧妙になっただけなんじゃないかと疑い、車椅子のテレパス使いや変なヘルメットを被った磁石の人の組織にも協力を頼った。
そして彼らの協力でオメガ計画は壊滅していたという事実が明らかになった。
ありがとうハゲの人とヘルメットの人。
この恩はいつか返す。
完全な自由を得た俺たちは、ハゲの人とヘルメットの人が運営してる組織に誘われたが、そこは丁重に断って兄妹で力を合わせて生きていく道を選ぶことにした。
丁重に断りの連絡を入れたとき「気が変わったらいつでもおいで」と言ってくれたあの二人には感謝しかない。

そんな訳でウエポンオメガ計画打倒は思っていたよりもあっさりと終わってしまい、後は計画がどこかでこっそり続けられないように監視と調査を続けながら平和に暮らすのみとなっていた。

「うにゃー、今日はお昼寝日和だー」

日々を自由に食って寝て過ごすダウナー系焔は今日も猫のように自由人。

「お姉ちゃん!今日学校でしょ、遅刻するよ!」

個性の強い姉と妹に挟まれてるアクアは3姉妹では最も常識人で苦労人。

「おっしゃぁぁぁぁ!!学校行くぞおおおお!!!気合い入れろお前らあああああ!!」

冷たいシャワーで汗を流したヒョウカは今日も元気いっぱい。

個性豊かな妹たちに囲まれてしあわせだな、おい。

今日も平和で刺激的な1日になる。

第六話

今日は月曜日。
ほとんどの学生にとっては憂鬱な1週間でいちばん憂鬱な1日になるだろう。
俺の友人のハジメにとってもそういう日だ。
「ようハジメ、元気かー？」
「うん、眠くて元気ない……」
今日も遅刻ギリギリで教室に来たこの男は南雲ハジメ。
俺が始めて学校に通い始めた頃、ぼっちだったハジメを見て話しかけたのが始まりだ。
まあその辺は話すと長くなるから割愛だ。
中学でも周囲からの評判は悪く、周りの人間には止められたが実際に話してみると人当たりは良く、気さくなやつだった。
俺の知らない面白いことをいっぱい知ってる面白いやつでもある。
世間ではそういう作り話にどっぷりハマってるやつのことを『オタク』と呼ぶらしく、

世間体は悪いんだとか。
なんでオタクが悪いことなのかは興味がないので知らん。
「おハジメ～」
「おはようハジメくん」
「おはよおおおおお!!オラアアアア!!気合い注入じゃオラアアアアアアアアアア!!!!」
上から順に動画投稿者みたいな独特な挨拶をする焔。
普通に挨拶するアクア。
騒がしいのがヒョウカだ。
やる気のないハジメを脇でがっちりホールドして気合い注入と称したグリグリ拳骨による儀式を行っている。おいやめろ死ぬから。
もちろん手加減はしているようなので、ハジメの頭が潰れるようなことは起きない。
本気だったらハジメはもう、死んでいる。
「やめなよ、ハジメくん困ってるでしょ」
「これがあたし式の挨拶だ!」
ヒョウカはこうやって気に入った相手に少々乱暴なスキンシップを行うのが好きだ。
まさに肉食女子の鑑。
「ていてい、怒った?」

苦笑いを浮かべるハジメが面白いのか、頬っぺたを引っ張る焔。コラやめなさい。
「ふたりとも止めなよ、ハジメくん困ってるよ」
姉妹のハジメ弄りを見かねたアクアが止めに入る。
「「はーい」」
アクアに胃袋を捕まれているふたりは、素直にハジメから離れる。
落ち着いたところでもうひとり、他の少女がハジメに話しかける。
「おはよう、ハジメくん。　みんな今日も賑やかだね」
白崎香織。
この学校の6大女神にして、南雲ハジメに最も強く好意を持つ女だ。エンパシーを使うとやべえくらいの好き好きオーラが出てるのが分かる。前が見えねえとか、そういうレベル。
「おはしらさき〜」
「白崎さんもおはよう」
「おはぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!!」
約1名、テンションが若干おかしいやつをスルーして俺も会話に加わる。
「おはようさん」
周囲からハジメと俺に対して嫉妬と殺意と羨望が籠った視線が向けられているが、そ

れを露骨に態度に出すような間抜けはいない。
檜山を中心にしたチンピラ４人組は隅っこから睨むだけでなにもしてこない。
なにかしたらその瞬間俺を敵に回すことになるのが分かってるからだ。
中学時代、まだ学校に馴染めていなかった妹たちにヤンチャ（）しようとしてた連中が高校に入学できたのが不思議でしょうがない。
まだ過去に俺と妹たちにボコボコにされたトラウマが抜けていないのか、睨むだけに留まっている。ふははは！強いやつとは喧嘩できねえか！雑魚どもめ!!
それはただひとり、例外レベルでガッツのあるやつを除いてだが。
「南雲君。おはよう。毎日賑やかね」
「香織、焔にアクアにヒョウカも、また彼らの世話を焼いているのか？　本当に、皆は優しいな」
「全くだぜ。　ヒョウカもそんなやる気ないヤツにゃあ何やっても無駄と思うけどなぁ」
八重樫雫。
六大女神最後のひとりらしい剣道の達人。
アクアとは苦労人同士で気が合う友達らしい。
少女趣味なとこも気が合うらしく、休日にはふたりでお菓子を作ったりしてるそう

だ。
学校ではそんなとこ全く見せないから意外だな。ギャップがすごい

天之河光輝。
例外的なガッツがある男。
良いやつだとは思うが、俺としては性善説信奉者で個人的にはあんまし好きじゃない。また、人の話をほぼほぼ聞かずに暴走する悪癖持ちなので手綱を握ってる八重樫には同情するぜ。
過去に檜山をボコボコにした件について、檜山たちから一方的な話（内容は檜山たちに都合良く改変してる）を聞いただけで俺を悪者だと決めつけてるので質が悪い。本当は正義の味方ぶっただけの自己中なんじゃないかと思う。
まあ良くも悪くも面白いやつだ。
……見てるだけなら。

最後のひとりは坂上龍太郎。
背が高く、大柄な体格をしていて熱血漢な性格であり、同じく熱血なヒョウカとは気が合うが友達以上、恋人未満の関係であり、始めの頃は俺のことも天之河からの影響で

気に入らなかったらしい。今ではヒョウカからの話で大分イメージが改善されているようだ。

因みにヒョウカ曰く、生粋のロリ〇ンでベッドの下に隠してある叡知の本はロ〇コン本ばかりだとか。

……妹よ、お前に情けはないのか？

そんな訳で、俺の中では面白3人組と呼んでいる彼らのリーダー、天之河光輝は俺とハジメのことが心底嫌いだ。

俺はお前のこと結構好きなんだけどな、見てる分には面白いから。

「私はハジメくんとお喋りしたいから話しかけてるだけだよ？」

「私はお菓子をお兄ちゃんとハジメくんに食べてほしいからね」

「ハジメんの背中、枕にちょうどいいからね～」

「元気ねえやつには元気注入じゃコラアアアア!!」

そんな彼女たちを見て天之河をなにを思ったか、ため息をつく。

「ああそうか、本当にみんな優しいんだな」

エンパスで感情を覗くと、俺とハジメへの嫌悪と妹たちや白崎への好意がダイレクトに伝わってくる。

なんだぁ……？テメェは……？人様の妹に色目使ってんじゃねえぞ……！

俺が天之河に怒りを覚えると、くいくいっと誰かが俺の服の裾を引っ張った。

「おはよ、ハク」

中村恵里。

六大女神最後のひとり。

小柄ではあるが胸はやべえくらいデカイ。

そして俺の彼女である。

俺が嫉妬と羨望と殺意を向けられている最大の理由は恐らく恵里だろう。

「おはよう恵里」

妹たち同様に頭を撫でてやると、気持ち良さそうに目を細める。猫かな？

自由を得たあの日、恵里と父親の命を救ったことを覚えていた彼女はずっと覚えていた。

そしてこの高校に入学してから俺と再開してすぐに告白したのが馴れ初めだ。

俺としてはそんな昔のことなど、とっくに忘れたものだと思っていたが、恵里にしてみれば一生ものの恩人らしい。ちなみに父親との親子仲は今でも良好だそうだ。

良かったじゃん。

まあ、そのまま付き合うことになったのだから人生分からないもんだ。

騒がしい朝と退屈な授業も過ぎて、お昼の時間。
「ハジメ、飯食うぞ」
「ハクにぃ～、飯食わせろ～」
「お弁当いっぱいあるから皆で食べようね」
「オッシャアアアア!!腹減ったぁぁあああ!!」
俺がハジメの元に向かうと妹たちも自然と集まってくる。
「ねえねえ、私も混ざって良いかな？」
「私もハクと一緒にお昼食べたい」
そこに白崎と恵里も加わり、さながらのエリア51のような混沌地帯の完成となる。
「い、いやぁ、僕はもう食べたから……」
「そんなんで食ったことになるのか。お前の燃費すげえな」
ハジメの手に握られているのは空になった栄養ゼリーの袋。それじゃまだ腹が減ってるだろ。
「はい、私のお弁当分けてあげるね」
「私のお弁当もあげる！」

アクアと白崎が弁当を分けてやると、ハジメも観念して差し出されたおかずを食べる。

ちなみに箸を持って無かったのでふたりから直接食べさせて貰ってる。

これにはアクアと白崎に惚れてる男子からの殺意と嫉妬のボルテージはうなぎ登りに上昇する。クソウケる。

「皆、それにハジメ、ちょっと聞きたいことがあるんだけどいいか？」

「なに？」

「え？なになに？」

「なんだぁあああああ!!」

「なぁに？」

「んー？」

殺意の嵐でげっそりとした表情をするハジメ、それに妹たちと恵里と白崎に、俺は問う。

「お前ら、海外旅行とか興味ないか？」

「あたしはあるぞ!!!美味いもん食いてええええ!!!」

「南の国でお昼寝したーい」

「外国のお菓子いっぱい食べて、海も泳ぎたいね～」

「僕は別にいいかな、家がいちばん」
「南雲くんと一緒にパリとか行ってみたいなぁ」
「わたしはハクと一緒ならどこでもいいよ」
暖かい国で昼寝したい焔。
外国のお菓子と海で遊びたいアクア。
グルメに興味ありのヒョウカ。
インドアなハジメ。
白崎はハネムーンな妄想が零れ、恵里は俺に着いてくる。
南雲以外全員が興味あるようだ。
良かった、なら避難しなくても平気そうだ。
「よーし、なら全員そこから動くなよ～」
「「「「「？」」」」」
俺が警告したその瞬間、教室に出現した魔法陣により、教室内にいた人間は全員神隠しの如く姿を消すことになった。
この事件が世間を賑わすことになることも、未来予知で知っている。

真っ白い空間。

実体を持たない神が座する人工的?神工的?に作られた空間であることは時間操作による未来視と現実改変能力で無知と既知を操ることで既に知っている。

この空間に居座っている神を自称するエヒトという存在と、その正体は単なる魔法を極めた人間ということも知っている。

そして、エヒトが俺たちを異世界に召喚しようとしていることもだ。

本来なら最上位の魔法を持たない者では介入できないはずの空間に突然の訪問者が来たことにエヒトは動揺を隠さずに叫んだ。

「誰だ!?なんだ貴様は!?!?!」

「ウエポンオメガ８９号。お前をぶち殺すミュータントだ」

それだけ言うと俺は間髪入れずにエヒトの胸に拳を突き刺し、現実改変能力で魂を消滅させる。

哀れな神は断末魔すら残せずに存在諸とも消える。

エヒトの消滅を見届けると俺は魔法陣の流れに戻り、召喚された家族と友達に合流する。

魔法陣の光、すごく目がチカチカする。欠陥魔法だなこれは。

そんな目も眩むような光が晴れると、そこはどこかの国の大聖堂のような場所。
飾ってある絵画は、地球の美術館でも滅多にお目にかかれないような立派なものばかりだ。
特に目の前にあるでっかいやつは、ルーブル美術館とかじゃないと見られないだろう。
周囲には明らかになにかしらの宗教関係の服装をした紳士淑女。
呆気に取られているクラスメートたちに、正面にいる老人が口を開く。
「ようこそ、勇者様。　そしてその同胞方。私はイシュタル・ランゴバルドと申します。以後お見知りおきを」
さらば現世、ようこそ異世界。
生まれて始めての海外家族旅行1日目、スタート。

第七話

例の広間からイシュタルに案内されて移動した俺たちは、大きなテーブルを囲んで食事の席に着いていた。

「おいおいおい!!にーちゃん!これうめえぞ!!なんかよくわかんねーけど!すげーうめぇぞおおおお!!」

ヒョウカが大興奮しながら食ってるのは虹色に光ってる変なカエルの姿焼きだ。

そんなものを美味そうに食ってるヒョウカに女子はドン引きし、男子は恐る恐るといった感じでカエルを食い、目を輝かせて食ってる。

相当美味いらしい。俺も試しに食ってみたけど、そこまで美味くなかった。単純に舌に合わないってやつなんだろう。

飲み物も虹色をしてるジュースを飲んでみたが、こっちは果物の味がして美味かった。

兄妹1の食いしん坊のヒョウカはあれこれ口に入れては美味い美味いと騒いでいるのをメイドたちが微笑ましそうに見てる。

隣の席のハジメに聞いてみたところ、あれは子どもを見守るお母さんの目らしい。
おいこら、なに人の妹に母親気取ってんだ貴様ら。
「すみません、この食材はなんていうんです?」
アクアは本物のメイドと未知の食材に興味津々で、食事そっちのけでメイドたちに色々質問責めにしてる。
「ｚｚｚ……」
焔は食事をさっさと済ませていつも通り昼寝中。
平常運転の妹たちに影響されたのか、動揺していたクラスメートたちも落ち着きを取り戻しつつある。
全員の腹が満たされたところで、イシュタルというジジイが本題に入る。
「さて、あなた方においてはさぞ混乱していることでしょう。一から説明させて頂きますのでな、まずは私の話を最後までお聞き下され」
始めったイシュタルの話は、実に魔法チックで、どうしようもなく自分勝手な内容だった。
詳しいことは……まあ原作を読め、とあの英国淑女のようにかっこつけて見る。
原作ってなんだ??
まあいっか。

魔人が魔物を兵器として利用しているのは、なんとなくこの世界の魔物に昔の自分を重ねるみたいで俺は少し嫌な気分になる。

魔人への評価が少し下がった。

「ヒョウカだけにってか、にーちゃん！」

やかましいぞヒョウカ。

「あなた方を召喚したのはエヒト様です。我々人類が崇める守護神にして唯一神。

そして、この世界を創られた至上の神。

勇者として選ばれたあなた方には力が与えられています。どうかそのお力でこのトータスの人類を救って頂きたい」

イシュ……なんだっけ、名前忘れちゃった。とにかくサンタクロースみたいな髭をした偉いジジイはどこか恍惚とした表情を浮かべて話してる。

神託を聞いた時のことでも思い出しているのだろう。エヒトの正体は上位世界で到達者と呼ばれる領域まで魔法を極めた人間であり、ただの自称神に過ぎない者であり、つい先ほど俺がぶっ殺したチンケな存在なのに。

バラして見たいけど、今ここで「エヒト殺した」って言ったら絶対ろくなことにならないから黙ってることにする。

なにせ、この世界の人間はほぼ全員がエヒトを崇めているらしいのからな。

イタズラ感覚で人類を敵に回すのは勘弁だ。
そしてジジイの話がまだ途中なのに、悠然と立ち上がり猛抗議する人物が現れた。
愛子先生だ。
「ふざけないで下さい!!結局、この子達に戦争させようってことでしょ!!
そんなのこの子たちの!先生として!!私は絶対に許しません!!
私達を早く帰して下さい!」
怒る愛子先生。今年で二十五歳の社会科教師で、小さな体で生徒のため必死に頑張る彼女は生徒からの人気と信頼は非常に高い。
愛ちゃんというあだ名をヒョウカに付けられてそれがクラスに浸透して親しまれているのだが、本人はそう呼ばれるとキレる。
威厳ある教師を目指しているからだ。
ちなみにあだ名に関してはヒョウカをちゃんと躾られなかったという責任から俺も怒られた。
正直、すまんと思ってる。
今回のことも、理不尽な召喚に怒って真っ向から異を唱えられる勇敢で信頼できる良い先生だ。
「お気持ちはお察しします。しかし……あなた方の帰還は現状では不可能です」

場の空気が凍った。
重いプレッシャーに押し潰されたように、大半のクラスメートは何を言われたのか分からないという表情でジジイを見てる。
「そ、そんな……」
力の抜けた先生が腰を落とす。
周りの生徒達も口々に騒ぎ始めた。
「帰れないってなんだよ！帰らせろよ！」
「嫌だ、戦争やだ！」
「冗談じゃない！俺は家に帰らせてもらう！」
おい最後のやつ、物語だったらそのセリフを言ったやつは高確率で死ぬってハジメが言ってたぞ。
みんなパニックになってる。
妹たちは平然としてる。幼少期の生い立ちや能力を考えれば元の世界から迎えが来るまでの間、この世界でも十分生きていけるものな。
恵里はというと、俺の服をぎゅっと掴んで震えていた。怖いみたいだから頭を撫でてエンパスで心を落ち着かせる。

ハジメは……案外平気そうにしてる。
海外旅行もひとりだけ興味無いって言ってたし、巻き添えにするのは悪かったかな、と思ってたけどこの様子なら大丈夫そうだ。
そういえばあいつ、こういうパターンの作り話をたくさん読んでるんだっけ？
だから平気なのか。

ジジイにテレパシーを使うと「エヒト様に選ばれたことをなぜ喜ばないのか？」という意思をはっきりと感じ取れる。
こいつぁ、クレイジーだぜ（ドン引き）

未だパニックが収まらない中、誰かがテーブルをバンッと叩いた音がする。
天之河だ。
なにやら面白いことになってきた、とワクワクする。
全員の注目が集まったのを確認すると天之河はおもむろに話し始めた。
「皆、ここでイシュタルさんに文句を言っても意味がない。だってどうしようもないんだ。
俺は戦おうと思う。この世界の人達が滅亡の危機に瀕してて、それを知って、放って

おくなんて俺にはできない。それに人間を救うために召喚されたのなら救済さえ終われば無事に帰してくれるかもしれない！」

もうエヒト死んでるから無理だぞ。

ていうかあのサンタ擬き、名前イシュタルだったのか。

「そうですな。エヒト様も救世主の願いを無下にはしますまい」

俺エヒトの心読んだけど、あいつ帰す気なかったっぽいぞ。ついでに言うとお前の体乗っ取るつもりだったから俺様にお辞儀をするのだポッター。

「それに、俺達には大きな力があるんですよね？ここに来てから妙に力が漲っている感じがします」

「ええ、そうです。ざっと、この世界の者と比べると数倍から数十倍の力を持っていると考えていいでしょうな」

俺はそんなの感じないぞ。妹たちにも聞いてみる。

「ホムラはなんもないぞ～」

「私もなにも感じないよ」

「おっしゃぁぁぁ!!!良くわかんねーけど強くなってんのかぁぁぁぁ!!」

約1名、微妙にわかり辛い返答が来てるが、少なくとも強くなった実感はないらしい。

そしてもうちょい声抑えろ。

「うん、ヒョウカだってああ言ってるし大丈夫だ。他の皆にも強い力があるはずだ！俺は戦うぞ！人々を救い！皆が家に帰れるように！世界も皆も救ってみせる!!」

ギュッと握り拳を作りそう宣言する光輝。無駄に歯がキラリと光る。

ヒョウカのややわかり辛い返事は都合良く受け取られたらしい。強くなった実感湧かないって意味なのにね。

同時に天之河のカリスマは遺憾なく効果を発揮された。

絶望の表情をしていたクラスメイト達は活気と冷静さを取り戻し始めている。光輝を見る目はキラキラと輝いておりまさに絶望の中の希望とを見る目だ。女子生徒の大半はお熱い視線を送っている。

……ここで実はもうエヒト殺したから帰れないとネタバラシしたいが、どうせろくなことにならないので自重する。

それに、帰る方法は用意してあるからな。

問題なのはその迎えがいつ来るかだ。

未来視によると今から大体1年後の未来、その時間に同胞たち……あのヘルメットの人やハゲの人の仲間が迎えに来ることになってる。

エヒト殺したせいでお前ら全員1年は帰れないからｗｗｗｗ、なんて言ってしまえば暴動もんの大騒ぎだ。

「へっ、お前ならそう言うと思ったぜ。お前一人じゃ心配だからな。俺もやるぜ？」
「龍太郎……」
「今のところ、それしかないわよね。……気に食わないけど……私もやるわ」
「雫……」
「え、えっと、雫ちゃんがやるなら私も頑張るよ！」
「香織……」
いつものメンバーが天之河に賛同する。
後は当然の流れというようにクラスメイト達が賛同していく。愛子先生はオロオロと「ダメですよ～」と涙目で訴えているが天之河が作ったこのビッグウェーブの前では無に等しい。
その勢いで大半のクラスメイトが戦争に参加することを表明してしまった。
流れに任せて参加を決めたクラスメイト達は、戦争をすることどういうことなのか、恐らくはわかってない。俺のような超人兵器として産まれたやつならともかく、普通に産まれて育った連中に人殺しは無理だろう。
多分、どこかで精神崩壊を起こすはずだ。
……今のうちに止めておくか。
そんな風に考え事をしていると、ふと視線を感じて顔を上げる。イシュタル爺の視線

が俺と妹たちに向いていた。
「どうしました?まだ参加を誓っていないのはあなた達だけですよ」
愛子先生はまだ参加を決めかねている俺たちを最後の希望にすがるような眼で見ている。
その目は「戦争、ダメ、絶対」と訴えているのがエンパスやテレパスを使わなくてもわかる。
妹たちは今までの経験から俺が方針を決めるのを待っているようだ。
「兄妹を代表して言います。俺はこの戦争への参加には条件を付けたい」
「それは、如何なる条件ですかな?」
イシュタル爺も偉大なる神に選ばれし救世主である勇者様方をタダで戦わせるつもりは無かったのだろう。
案外すんなりと話を聞いてくれる。
「あいつマジ空気読めないよな」
「光輝くんが戦うって言ってるのにどうして和を乱すのよ……?」
「あいつだけ死んでヨシッ!」
おい、全部聴こえてるぞカス雑魚どもが。
妹たちにも聴こえていたらしく、三人とも眉間にシワが寄ってる。

ここでキレずに抑えてるのは偉いぞ、後で存分に撫でてやる。
「まず、俺たちの身の安全と生活の保証。
それから性格や能力的に戦闘に向いてないやつを前線投入することは止めて欲しい。
無論、戦闘に向いてるやつでも本人がそれを拒んだ場合もだ。
それと……戦闘で心や体に負ったキズをしっかりケアすること。この４つだ」
「良いでしょう。しかし、戦闘に向いている者を戦わせない、というのは流石に飲めませんな。あなた方には人類を救うため戦って貰わないといけないのですから」
「ならそれでもいい」
天之河は何か言いたげな憎々しい目で俺を見ているが、クラスメイトの安全に関わることだと分かっているから何も言えない感じだった。
こうして俺たちの異世界生活……じゃなくて異世界家族旅行１日目は終わるのだった。

第八話

次の日、早速戦争に備えて訓練が始まる。
まず、集まった俺たちに騎士団長のメルドという男から銀色のプレートが配られる。
勇者様と愉快な仲間達の訓練だから手は抜けないようだ。
メルド本人も、「むしろ面倒な雑事を副団長に押し付けられる！」と豪快に笑っているくらいだから大丈夫なんだろう。
その副団長とやらは、アクアや八重樫と同じ匂いがするな。苦労人の匂いだ。
「このプレートはステータスプレートと呼ばれているアーティファクトだ。
名前の通り、自分の客観的なステータスを数値化して示してくれる便利なものだ。
トータスにおける身分証明書でもある。
大事なものだから失くすなよ？」
要点だけをまとめてくれる有能メルド。
彼はヒョウカと同じく豪快お気楽な性格なようで、部下の騎士にも俺たちとは仲間として対等な立場として接するように命令していた。
アクアとヒョウカは既に彼のことを気に入ったようだ。

最も、焔は……。
「ｚｚｚ……戦争だるい……」
立ったまま寝るという、かなり器用な真似をしている。
しかもバレないように俺の真後ろに陣取ることでメルドからは完全に死角となっている。
コラ、起きなさい。
「アーティファクトってなんだ？」
誰かが質問する。
「アーティファクトって言うのはな、現代じゃ再現できない強力な力を持った魔法の道具のことだ。ステータスプレートはその中でも量産されたありふれたものだから唯一、一般人にも気軽に使える代物だ」
ちなみに、使い方は血を一滴垂らすだけのお手軽なもののようだ。
ＤＮＡを個人の識別に使うだけじゃなく、能力値まで測定できる道具ってのは便利だな。
さっそく試してみる。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

ハク　１７歳　男　レベル：１
天職：■■■■■
筋力：■■■■■
体力：■■■■■
耐性：■■■■■
敏捷：■■■■■
魔力：■■■■■
魔耐：■■■■■
技能：発電・電気操作・電波操作・電波吸収・
高速飛行・ヒーリングファクター・メガモーフ・・肉体生体金属化・環境適応・テレキネシス・テレポート・テレパス・能力キャンセラーブロック・オプティックブラスト・エネルギー吸収・エネルギー増幅・エネルギー操作・フォースフィールド・物質変換・物質創造・現実改変・確率操作・認識改変・時間操作・空間操作・重力操作・分子操作・原子操作・量子操作・言語理解
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

表示……されないじゃないかッッッ!!

正確には技能はちゃんと表記されてるのに、他のステータスと天職の欄は黒潰しに

なってる。
壊れてんじゃね？と思い、プレートをあれこれ弄ってみるがどうにも違うようだ。
お使いのプレートは正常です。
メルドからステータスの説明がされるので注意して聞く。
「全員見れたか？　説明するぞ？　まず、最初にレベルってのがあるだろ？
それはステータスの上昇と共に上がる。
上限が１００で、それがその人間の成長限界だ！つまりレベル１００は人間が到達できる領域の現在値だ。
最も、限界まで強くなったやつなんてそうそういないがな」
説明的に考えて、地道に筋トレや戦闘に励んで腕を磨く必要があるみたいだ。
「ハジメ、お前のはどうだ？ちゃんと表記されてるか？」
「僕のはこんな感じだよ」

ハジメのステータスは、

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

南雲ハジメ　１７歳　男　レベル：１

天職：錬成師
筋力：１０
体力：１０
耐性：１０
敏捷：１０
魔力：１０
魔耐：１０
技能：錬成・言語理解

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

うん、ちゃんと表示されてる。
やっぱり俺のが壊れてたんだろうか。
「メルドォォォォォォ!!!アタシの壊れてるのかぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!!!」
「うおぉぉっ?!　ヒョウカか！急に叫ぶなぁ!!」
メルドもアホのヒョウカのいちいち叫ばないと会話できない洗礼を受けている。
自我が芽生えた瞬間からこれだから俺も最初はビビった。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

ヒョウカ　１７歳　女　レベル：1
天職：■■■■■
筋力：■■■■■
体力：■■■■■
耐性：■■■■■
敏捷：■■■■■
魔力：■■■■■
魔耐：■■■■■
技能：大規模氷結・大規模冷却・氷操作・冷気操作・氷分子操作・水分子操作・絶対零度・絶対零度耐性・超怪力・超耐久力・ヒーリングファクター・環境適応・言語理解
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

ヒョウカがメルドにプレートを見せると、メルドはんんっ!?と首を傾げ、見間違いか？とでも言うようにプレートをコツコツ叩いたり、光にかざしたりする。
そして、ジッと凝視した後、もの凄く微妙そうな表情でプレートをヒョウカに返す。
技能欄はともかく、ステータスと天職の部分が全部黒塗りになってんのはおかしいもんな。

「すまん、壊れてるみたいだ」
「やっぱりかあああ!!!!!!」
ヒョウカには新しいプレートを後日用意されるとして、他のクラスメイトも順番にメルドにプレートを見せに行く。
「メルド、俺のも壊れてる」
「わたしも～」
「私の壊れてるっぽいです」
焔とアクアもそうらしい。
あ、さては俺たちのステータスがステータスプレートだと測れないからか？

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

焔　17歳　女　レベル：1
天職：■■■■■
筋力：■■■■■
体力：■■■■■
耐性：■■■■■

敏捷：■■■■■
魔力：■■■■■
魔耐：■■■■■
技能：パイロキネシス・熱伝播制御・分子運動制御・高速飛行・フレイムフォースフィールド・完全熱耐性・完全無酸素耐性・ヒーリングファクター・環境適応・言語理解
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
アクア・ザ・サブマリナー　１７歳　女　レベル：１
天職：■■■■■
筋力：■■■■■
体力：■■■■■
耐性：■■■■■
敏捷：■■■■■
魔力：■■■■■
魔耐：■■■■■

技能：水分子制御・肉体変化・肉体強化・液体操作・気体操作・水中呼吸・水圧耐性・超高温耐性・超低温耐性・環境浄化・ヒーリングパワー・人体再生・ヒーリングファクター・環境適応・言語理解

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「……」

メルドも言葉を失っている。四枚連続で壊れてるプレートを見て愕然としているが、多分これ壊れてない。

俺たち兄妹の能力とＤＮＡ構造が特殊だから、プレートもバグってるだけだ。

今ここで言うべきか迷ったが、テレパスで妹たちと相談した結果、黙っていることになった。

技能欄の項目については認識改変能力を使い、違和感を持たないように細工しておく。

根掘り葉掘り聞かれても面倒だからな。

気を取り直して俺たちの次に見せた天之河のステータスは……。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
天之河光輝　１７歳　男　レベル：１
天職：勇者
筋力：１００
体力：１００
耐性：１００
敏捷：１００
魔力：１００
魔耐：１００
技能：全属性適性・全属性耐性・物理耐性・複合魔法・剣術・剛力・縮地・先読・高速魔力回復・気配感知・魔力感知・限界突破・言語理解
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

強いのか弱いのか、分からん。だが俺の次くらいには豊富な技能がある。

「ほお～、流石勇者様だな。レベル１で既に三桁か……技能も普通は二つ三つなんだがな……規格外な奴め！　頼もしい限りだ！」

「いや～、あはは……」
メルドのレベルは６２。
そして彼のステータス平均３００。
この世界でもトップレベルの強さらしいが、光輝は強さはレベル１でもうその３分の１にいる。
ちなみに、技能＝才能である以上、完全に先天的なものなので増えることはないそうだ。
通りでミュータントパワーばかりが並んでた訳だ。
そして光輝に及ばないが、他の連中も全員軒並みチートだったようだ。
プレートが壊れてたヒョウカ以外は全員チートだ。
……隣にいるハジメがすごく嫌な汗をかいている。心拍数も露骨に上がっていて、瞳孔も少し開いてる。
目に見えて狼狽えている。
ハジメのステータス、すごく低かったからな。
しかも技能も実質ひとつしかなかった。
とうとうハジメの番が回ってきた。
ホクホク顔のメルドにハジメはプレートを渡す。

「ああ、その、なんだ。錬成師というのは、まぁ、言ってみれば鍛冶職のことだ。鍛冶するときに便利だとか……」

歯切れ悪くハジメの天職を説明するメルド団長。

その様子にハジメを目の敵にしてる檜山が、ニヤニヤとしながら声を張り上げる。

「おいおい、南雲。もしかしてお前、非戦系か？　鍛冶職でどうやって戦うんだよ？　メルドさん、その錬成師って珍しいんっすか？」

「……いや、鍛冶職の十人に一人は持っている。国お抱えの職人は全員持っているな」

「おいおい、南雲～。お前、そんなんで戦えるわけ？」

檜山が、実にウザイ感じでハジメに絡んでいる。

「ならハジメは戦う必要はない、そうだろ？メルドさん」

「あぁ、そういうことになるな」

昨日の約束についてもう忘れてんのか貴様は。

見れば柔道部のでっかいの名前は……永山だったな。

それにハジメを笑わなかった連中も俺の言葉に頷いている。
「戦闘に向いてないやつは戦わせなくていい、その約束は守って貰わないとな」
「ああそうだな。　訓練には参加して貰うが、ハジメは武器や防具の製作に回して貰えるように手を回して……」
「ちょっと待ってください!!俺は納得できない！
仲間がみんな戦場に行くのに南雲、お前だけ安全な場所にいるつもりか!?」
その人事に待ったをかけたのは天之河光輝だ。
おいコラ、テメーコラ。
昨日の話し合いで俺を睨んでたし、やっぱり不満があったか。
そういやこいつ、ハジメのこと嫌いだったな。
他のクラスメイトならともかく、大嫌いなやつが安全な場所にいるのがそんなに気に食わんか。
「しかしなあ天之河よ、ハジメはステータスも技能も戦闘に向いてない以上、無理に戦線に出せば死ぬだけだ。これは適性を考えた上での配置なんだから問題ないはずだ。
そうだろ、メルドさん」
「そうだ、なにも問題はない」
「でも……！」

パシン。

八重樫が天之河の頭を軽く叩いた。

姉が出来の悪い弟を叩くような光景に見えたのは俺の気のせいか。

「いい加減にしなさい。

地球にいた時から南雲くんは争いには向いてないし、武術だってやったことないんだからどう考えても戦争に出るのは無茶よ」

「雫！そんな！」

てかお前は南雲が嫌いだから戦線に連れだそうとしてだけだろう。

檜山たち小悪党４人組も天之河擁護に加わったので、強引に話を打ち切らせる。

『ていう訳で、ハジメの扱いはこれでいいな？』

声にテレパスとエンパスを乗せることで強引に反論を封じる。異論は認めない。

だって、ここで戦線離脱を認めて貰えなきゃ後々困るのは他のクラスメイトも同じだからだ。死にかけるような思いをして挫折した場合、こういう逃げ道が必要だ。

天之河とハジメのステータスを見て爆笑していた小悪党組がそれをどこまで理解しているかは知らん。

こうして俺は友人の南雲ハジメに安全な立ち位置を提供することに成功した。

勝手に連れてきた分の最低限の責任ってやつだ。

帰るまでは俺たちが全力で守ってやるから安心して武器製作に専念するがよい。

第九話

訓練開始から2週間ほど経過。

俺は訓練に出る傍ら、ハジメの武器開発に協力していた。

「それで銃の設計図はこんな感じだ。パワードスーツはこっち」

神の使徒としての能力がクラフトや技術工作に全振りされているのか、ハジメは俺が持つ知識を教えると、異常な速さで飲みこんだ。

まるで新品の乾いたスポンジが水を吸収するかのようだ。

やはり戦闘チートが無いだけで、神の使徒は全員チートのようだ。

「協力してくれるのはありがたいんだけど……なんでそんなに詳しいの？」

ハハハ、こちとら学習装置であらゆる学問や技術についての知識を直接インプットされてるからな。武器や兵器については最優先に詰めこまれたから当然のように知っているとも。

「それじゃ、俺は訓練出るから」

行ってら～、と俺を送り出すハジメ。

訓練場に行くと、妹たちが檜山たち小悪党組をボコボコにしていた。
３対４と小悪党組の方が数で勝っているにも関わらず、一方的な戦いになっている。
「しゃくねつ食らえ～」
「ちょっと頭冷やそうか」
「しゃおらぁぁぁぁぁぁぁ!!!」
三者三様の掛け声と共に、それぞれが得意技で檜山一味をボコボコにしてる。
「熱い！熱い!!」
「ごぼごぼごぼっっ!!　ごぷぅ!?」
「痛っ!?痛ぇ!!やめてくれぇ!!」
檜山一味ＡＢＣはそれぞれが炎に巻かれ、頭を水で覆われて窒息し、ヒョウカにマウントを取られた上で殴られている。
リーダー格である檜山は魂が抜けたように、ボケっと突っ立ってそれを見てる。
……は？　どゆこと？　どういう状況だこれ。
「あ、お兄ちゃん！」
アクアが俺を見つけて嬉しそうに小走りで寄ってくる。……檜山一味の返り血を顔につけたまま。
マンガに出てくるサイコパスかおめーは。

「顔、顔拭け」
　ごしごし。
　渡したタオルで顔を拭くと、アクアは俺に向かって言う。
「お兄ちゃん、あのね、檜山くんたちが襲ってきたの！」
「焔も襲われたぞ～」
「アタシもだぁぁぁぁぁぁぁ!!!」
　妹たちから詳しく話を聞くと、どうやら檜山たちはここ二週間で強くなって調子に乗り、妹たちよりも強いから襲える、つまり、昔返り討ちにされた屈辱を返せる、と勘違いしたようだ。
　しかも、妹たちのステータスプレートが未だにバグってるのを『弱いから数字化できないだけ』と都合良く考えていたようだ。
　なんてバカなやつらだ。
　それが俺の最初にパッと浮かんだ感想だった。
「おい、檜山と愉快な仲間たち。今の話は本当か？」
「うぐっっ、嘘だ……。　俺たちはステータスも表示できないほど弱っちいそいつらに訓練をつけてやろうとしただけなのに……」
　ていてい、と脇腹を軽く蹴りつつ檜山の仲間たちに聞くと、檜山たちは訓練をつけた

のだと主張する。
まあテレパシーでここ数分の記憶を探って檜山たちの言ってる主張は嘘だと分かったけどな。
本音では、自分たちの方が妹たちよりも強くなった（※勘違い）から今度こそ好き放題できる、と勘違いしてその気になったっぽい。
今まで相手にされなかった鬱憤とハジメに構ってる分の逆恨みも含めて、徹底的に辱しめてやろうとしたようだ。
周囲にクラスメイトがいないこの状況なら、逆に返り討ちにしても文句を言われる筋合いはないし、檜山たちがお得意の嘘をついたところで、後から出てくる証拠などなんとでもできる。
「あっそ。それで、俺の妹たちに悪さしようとした罪を償う覚悟はできたか？　返事は聞いてないから歯ぁ食いしばれよ」
俺は一方的に宣言すると、拳を固め、檜山の胸ぐらを掴む。
手加減はするから安心して殴られると良い。
「ひぃぃぃぃぃ!!やめてくれぇぇぇぇ!!お前らもなにか言えよぉぉぉお!!」
檜山は自分の仲間たちに助けを求めるが、仲間は全員気絶してるか、気絶したふりで誤魔化してる。

だんまり決め込んでるなこれは。
全員ぶっ飛ばすからそのまま大人しく順番待ちしてるように。
「やめない」
俺が拳を振り下ろそうとすると……。
「何やってるんだ!?」
その声に俺はバイオハザードのゾンビ気取りでゆっくり振り替える。
そこにいたのはやはり、あの男、天之河光輝だった。他にも愉快な仲間たちである坂上と八重樫も一緒だ。　……おい待て、白崎はどこだ？
「いやぁ、誤解しないで欲しいんだけど、俺は檜山を殴ろうとしていただけだ」
「なにをどう誤解しろと!?!?　……ってそうじゃない！　なにをしてるんだ！」
ナイスツッコミ。
「檜山たちが俺の妹たちを襲って返り討ちにされた。　で、今は俺が檜山たちを制裁しようとしてるところだ。邪魔をするな」
「檜山たちが悪いことをしたからって、それはやりすぎだろ!!悪いことをしたなら謝ればいいし、許すべきだ！」
普通の人間の世界なら、そうなんだろうな。
でも俺はやめない。人間じゃないし。

まずは1発目だ。拳を振り抜く。
「ぎゃふんっ!!」
檜山が悲鳴をあげる。
本当にぎゃふんって言うやつ初めて見た。
「やめろ!!」
「やめない!!」
もう二度と、悪さできねえ体にしてやる。
天之河は殺意すら感じる目で俺を睨むが、坂上は俺と天之河、どっちにつけばいいのか分からずに狼狽えているようだ。
待たしても膠着状態。面倒だな。
またテレパスとエンパスで強引に場を納めるか?
「ねえハク、ここは光輝の言うとおり、あなたが退いてくれないかしら」
そう思っていると、八重樫が天之河に助け船を出す。
そして俺にこっそりと耳打ちしてくる。
「……あなた達が嘘をついてるとは思ってないけど、見たところ檜山達は罰としては充分なくらい傷ついてる。これ以上やったらあなたが悪者になるから大人しく退いてくれない?」

「分かった、そういうことなら退こう」
八重樫は一見すると天之河の味方をしてるようで、実のところ完全に俺たちの味方のようだ。
「天之河よ、ここはお前に譲ってやる。感謝しろよ」
檜山を解放すると、腰を抜かしたように崩れ落ちる。まだ1発しか殴ってないのに。
俺は妹たちに撤収を告げ、その場を去ろうとすると、天之河に止められる。
「待て！　檜山たちに謝れ！やりすぎだ！」
「やなこった。くたばれ檜山」
「くたばれ～」
ついでに唾を吐き捨て、中指を立てて挑発する。
「こら！お行儀悪いことしないの！」
ぽか、ぽか。
アクアが俺と俺の真似をする焔を軽く叩く。
去り際に天之河が何かしてこないかと警戒していたが、何も起こらずに撤収できた。
恐怖の裏に、憎悪に満ちた感情をマグマのように滾らせている檜山については警戒が必要だな。次、面倒を起こしたら監視もつけるか。

さて、ハジメの工房の方はどうなってるんだろうか。楽しみだ。
「ようハジメ～。オモチャの具合はどうだ？」
「差し入れにクッキー焼いてきたよ！ここに置いておくから後で食べてね！」
アクアを連れてハジメの工房に行くと、銃やパワードスーツの原型がもう完成していた。
流石、錬成師は仕事が早い。
そして先客の姿もある。
「あ、アクアちゃんとハクくんも南雲くんに用があるの？」
「おう白崎か。この銃もう使えるのか聞きに来たんだ」
ハジメは白崎となにか話していたようだが、銃を手に取り、俺に渡してくる。
銃の種類はリボルバー。
コルトパイソンに近い見た目だが、若干違うハジメオリジナルの銃。
弾数はオーソドックスな6連発。
「うん。もう使えるはずだよ。テストはまだしてないけどね」
なら俺がテスターをしてやるか。
「的はどこだ？」
ないなら能力で作るけど。

「そこにあるのを使ってよ」
ハジメが指差した方を見ると、人型や動物の形に切り抜かれた木製の板が置いてある。
ご丁寧に板を立てるためのつっかえ棒も用意して、準備は万全のようだ。
「ありがてぇな。じゃあ使わせて貰うぜ～」
俺はそれだけ伝えると、的を持って出ていく。
バンバンバン！
銃弾はきちんと真っ直ぐに飛び、的を破壊する。そして漂う火薬の燃焼する匂い。
最高だな。
この分だとパワードスーツや例の動力炉が完成するのも直ぐだな。
剣と魔法の世界で銃やアイアンマンスーツがあれば、ハジメには向かうところ敵無しだろうな。
そう言えば、性能実験としてハジメも迷宮に来る予定なんだっけな。
「ｚｚｚ……何気にハジメンがいちばんのチートかもね～」
「かもな」
この銃があればハジメもそこそこの戦力になるだろう。

第十話

「なに？　ハジメが迷宮に行くだと？」
「うん、銃のテストがしたいんだって！」
　ある日の昼食の席で、アクアから聞かされたハジメが戦闘に出るという話。
「つってもアイツまだパワードスーツすら完成させてないじゃないか。それが完成するまで待たないのかアイツ？」
「うーん、そこはどうなんだろうね……。
　私も詳しく聞きたかったんだけど、はぐらかされちゃった」
　白崎のやつもハジメの工房に通っていて、なにか聞いてるはずだから、後で白崎からも話を聞いておこう。
「美味いぞおおおおぉ!!!」
「まだ眠いよ～……ｚｚｚ」
　訓練に気合い入れすぎて遅れた昼食にヒョウカはがっつき、焔はいつも通り良く寝てる。

アクアは厨房でこの世界で覚えた料理を作ってくれてる。
そして恵里はというと……。
「ふんっ!!」
ぶっすー、と不貞腐れた顔をして、俺から顔を背けている。最近はハジメやら天之河や檜山一味にばかり構っていたせいで、すっかりご機嫌斜めのようだ。
「悪かったって、ほら存分に撫でてやろう」
俺がそう言って、恵里を撫でてやろうとすると……。
「ふしゃーーーっっ！」
「痛って！噛みやがったこいつ！」
猫のように威嚇し、俺の指に噛みつく始末だ。
昨日の晩飯からずーっとこれの調子だ。
「聞いてくれよアクアちゃん！ハクってば酷いんだよ！私という美少女の彼女がいながら！トータスに来てからずーーっと南雲くんに夢中なんだよ!?信じられる!?ホモかよ!!」
「まあまあ、お兄ちゃんも悪気があったんじゃないから許してあげて。
……ね？　ほら、恵里ちゃんにもクッキーあげるから」
「わーい、許しちゃう！」

現金なことに、アクアのクッキーを食べて機嫌を良くした恵里様はダメ彼氏の俺を許してくれた。

「モグモグ……で、なんの話だっけ？」

「ハジメの迷宮攻略の話だ」

数少ない、ところかひとりしかいない友達を危険な目に遭わせたくないんだがな。

ハジメの説得は無駄。

本人が自分で言い出した以上、なにをしても意見は変えないだろう。あいつはそういう男だ。

パワードスーツの完成まで待たせるのも愚策か。

スーツは俺が張り切って協力しちゃったせいでアーク・リアクターの完成待ち状態になっちゃってるからな。そのアーク・リアクターも、もうすぐ完成するってハジメ言ってた。

迷宮へ行くのは避けられそうにないな。

ならもう開き直って俺と妹たちで恵里ごと守ればいいか。

「うん、そうしよう」

考えをまとめて遅めの昼食に舌鼓を打つのに専念する。美味い。

「たたた、大変だ!! ハク！今すぐ来てくれ！」

俺たちしかいない食堂に、誰かが不粋にも転がり込んできて大騒ぎする。
しかも訓練中だったらしく、泥まみれだ。
食堂が汚れるだろ。
「遠藤か、なんか用か？」
こいつは特殊能力レベルで影が薄いが、心音と匂いで気配を探れる俺の感覚は、見えなくても遠藤の存在を感じることができる。それが理由で地球にいた頃から俺たち兄妹は遠藤にやたら懐かれて頼りにされてる節があった。
パニック状態で呂律の回らない遠藤に水を飲ませて落ち着かせると、改めて要件を聞き出す。
「それで、どんな用事だ？」
「檜山が……檜山が南雲を殺そうとしてる!!」
兄妹全員が食堂中の椅子とテーブルをひっくり返す勢いで、食堂を飛び出した。

訓練場では檜山が倒れてる南雲の頭をサッカーボールのように蹴っ飛ばし、血を流す南雲を容赦なく、無慈悲に魔法まで使っていたぶっていた。
正真正銘の殺し合いをしてきた俺だからこそ分かるが、檜山本人は死なない程度に手

加減してるつもりだ。だが遠藤や他の生徒にとっては別。
檜山が本気で南雲を殺すつもりで攻撃してるようにしか見えない、それほど苛烈な攻撃だ。
理性の枷がねぇのかてめぇには。
「ギャハハハハ!!白髪野郎に守られなきゃなんもできねえ雑魚がよぉ!!」
お仲間のチンピラ3人を妹たちが病院送り状態にした八つ当たりを南雲にぶつけてるんだろう。
しかも暴行未遂の挙げ句返り討ちにされたのがバレてクラスメイトの治癒師からも助けて貰えなかったらしいじゃん、ざまぁ、非常にざまぁ。
「止めろ!!!
!!」
「ひでぶぅぅぅぅ
!!!」
檜山の顔面にストレートパンチ!相手は顔面崩壊を起こして死ぬ!サヨナラ!
「で、出たーー!!にいにの必殺ストレートだー!!」
「効果は抜群だぁぁぁぁぁ!!!
!!」
焔とヒョウカがノリノリで実況解説をするのを無視。アクアはそのふたりをガン無視して南雲の治療を始める。
「大丈夫?　すぐに治してあげるからね」

「どこが痛いのか言えるか？　言えないなら代わりに伝えてやるからどこが痛いのか心の中で念じろ」
苦しそうに息をしてる。
蹴られた肋骨が2、3本は折れてるようでかなり苦しそうだ。やっぱあいつ殺す勢いで暴行してみたいだな。
「焔、ヒョウカ。俺とアクアは南雲を治すからその間そいつを取り押さえろ」
「りょっ！」
「おっしゃぁぁぁぁぁぁ!!!任せろおおおおおお!!!」
前歯が折れて仰向けに倒れる檜山の両腕に焔とヒョウカがのし掛かり体重をかける。
焔はともかく、ヒョウカは身長もガタイもあるから重いぞ。
動きを封じるのを確認すると、南雲の傷をヒーリング能力で癒す。
この能力は死んでさえいなければどんな怪我も病気も治せる。言うなれば、他人にも使えるヒーリングファクターだ。
「よっし、治療完了だ」
「そこでなにをしてるんだ!?」
ここでタイミングの悪いことに天之河光輝と愉快な仲間たちご一行の登場だ。みんな拍手で出迎えてやれ。

「なにって、檜山が南雲を殺す勢いでリンチしてたから止めたんだよ」
ちょうど治療が完了して無傷の南雲と、血を流した状態で取り押さえられる檜山。
傷付いたまま取り押さえられる加害者の檜山。
無傷の被害者のハジメ。
端から見てる分にはどっちが悪者なのか、分かったもんじゃないな。まあいちばんは天之河に話を聞く気がないのが問題なんだけど。
「嘘をつくな!!　南雲には傷ひとつないだろうが!!」
そりゃお前、たった今、治したばかりなんだから当然だろ。最後まで話を聞いてから判断しろよ。
「いま俺とアクアで治療したからな。嘘だと思うなら他のやつにも聞いてみろ。　ここにいる全員が証人だ、ああもちろん、檜山以外だけどな」
「どうせお前から檜山を襲って、みんなに嘘を吐くように脅してるんだろ!!」
俺のこと嫌いなのは知ってるけど、ここまで話を聞く気がねぇのか。流石にこれは傷つくなあもう。
「そうだ、お兄ちゃんに助けを求めてきたのは遠藤くんだよ。　遠藤くんに話を聞けば分かると思うよ」
ナイス援護だアクア。

遠藤を連行してこい。

「アクア、君は優しいな……。でも悪いことをしたからって兄を庇う必要はない！むしろ身内の恥は身内が正さないといけない！正直になにがあったのか話してくれ！」

俺を庇う言葉は全部嘘だと完全に決めつけてやがるぞこいつ。いかれてんのか？

アクアの証言を嘘だと決めつけることは、俺に対して以上にアクアに対する侮辱だぞ。ほら、友達を侮辱された八重樫が後ろでお前のこと凄い殺気だった目で睨んでるぞ。

「兄ちゃんと姉ちゃんがウソつきだってのかゴラァァァァァァァァ!!!!!」

ヒョウカが犬歯を剥き出しにして天之河を威嚇する。今にも飛びかかる勢いのヒョウカを坂上と遅れてやってきた恵里が一緒になって「どうどう」と押さえて落ち着かせてる。あ、恵里の親友の親父みたいな性格のチビ助（谷口鈴）も一緒になって押さえてる。

坂上とチビ助の手が触れあってラブコメ空間が生成されてるのクソウケる。

「ガルルルルルルルルル」

オオカミか、ライオンか、それともヒョウか。

肝心なヒョウカは飢えた肉食獣のごとき眼光とうなり声で天之河を親の仇と言わんばかりに睨みつけている。ヒョウカは兄妹の中でもアクアのことが大好きだからな。

いちばん大好きな姉を嘘つき呼ばわりされて怒り心頭のご様子だ。
白崎は勇者一行ではあるが、口論に混じる気はないらしくハジメに駆け寄って彼の身を案じている。おい、ラブコメ空間Ⅱが形成されてるぞ。
坂上と谷口といい、ハジメと白崎といい、二人だけの世界に入り込んでるバカップル多いな。
「あーもう、滅茶苦茶だよ」
頭が痛いな、うん。
「彼は嘘なんて吐いてないわ、私が保証する」
意外なことに、八重樫が堂々と俺を擁護する。
これには俺も天之河も眼を見開いて驚いた。
「雫!? どういうことだ?」
「どういうこともなにも、彼は本当に南雲くんを助けただけなのよ。周りの状況を見れば分かるでしょ?」
周りを見渡せば、永山を始めとしたクラスメイトたちの非難がましい視線が俺……ではなく、天之河に向けられていた。四面楚歌なのは俺じゃなくて勇者の方だ。
「……ッッ!クソッ!」
話はまだ途中だが、天之河は怒ってどこかに行ってしまった。

「助かったぞ八重樫、感謝する」
「別にいいわよ、アクアにはいつも仲良くして貰ってるからね」
八重樫はしれっとした顔で天之河を追いかけていった。多分慰めるのか説教でもするのか、あるいは両方だろうな。